

## 私 の 心 に 残 っ た 本



## ブルーベリー

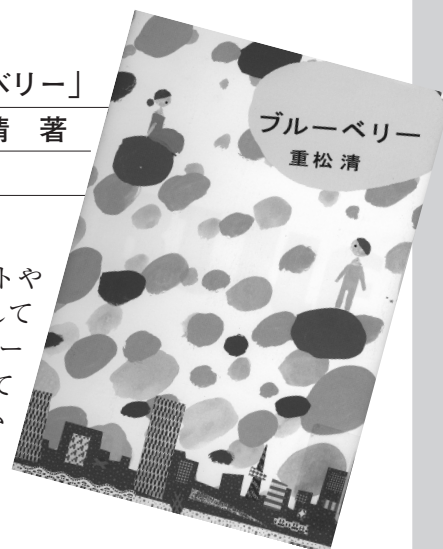
医療科学部助手  
(リハビリテーション学科作業療法専攻)

伊藤美保子

「ブルーベリー」

重松 清 著

(光文社)



読書をする目的は、人それぞれあると思う。  
私は小説を、(良い意味での) 現実逃避、気分転換の手段として読む。

重松清は私が好きな作家の一人で、新作を見つけると、ついつい買い込んでしまう。重松清の本は、多くが子どもや子どもを取り巻く環境を題材にしている、自分が親になる前(子どもの立場)でも、親になった今でもどの立場でも違和感なく読むことができ、また、数編の短編から構成されているため、空いたわずかな時間で読み進めることができるのも好きな理由の一つ。

この「ブルーベリー」は、重松清の作品には珍しく、子どもはあまり関連してこない。主人公の僕が上京してから生活を綴る12編の短編集。取って付けたようなハッピーエンドではなかったり、劇的な展開がある訳でもなく、一見淡白であるが、それ故に現実的に感じられる。時代背景は、私が田舎を出た頃とは違うため、分からない時代描写もあったが、インターネットを利用しながら「へえ～」と思いながら特にそのことが苦になることもなく、ほろ苦い気持ちで読み終えることができる作品だった。

私が高校を卒業して家族6人の生活から、一人暮らしを始めた頃は、『進学＝一人暮らし』であったため、一人暮らしが憧れではなかったが、やはりワクワクしていたように思う。その後当然のようにホームシックにかかり、そんなことがあったことも忘れて10年近く一人暮らしを満喫してきた。学生時代は、今までしたことのない位の勉強をし、慣れない自炊は楽しくもあった。病院実習では作業療法士の面白さを再確認できたと共に、レポートに追われ寝れない日々を送った。実習地を就職先と勘違いして父親が実習病院を見に田舎から突然出てきたこと、就職先を決めかねて兄に相談の電話を掛けたこと、懐かしい思い出が次々に蘇り、久しぶりに学生時代の友人に連絡を取ってみようかという想いになった。あの頃は気づかなかったが、色々な人たちに支えられて送った学生生活であったことを今更ながらに実感する。遠く離れて暮らす家族や地元の友達、同じ教室で学んだ友達、リハビリ・作業療法について一から教えて下さった先生方、遅くまで一緒

に病院に残ってレポートや患者さんについて指導して下さった実習地のバイザーの先生方、担当させて頂いた患者さん方、向かいの大家さん…本当に感謝の一言しか出てこない。

今、教える側にいる私が、この本を読んで思い起こした年代を、正に今、過ごしている学生達が、何だか羨ましく見える。友達の一言が、きっかけを作ってくれたり、人から言われた何気ない一言に傷ついたり、様々な人と出会っていく中で少しずつ大人になる準備を進めていく時代は、辛かったことも何故か、数年後には笑い話として話せるようになってしまう不思議な時代でもあると思う。

私がこの本の中で一番好きな話は、『人生で大事なものは(けっこう)ホイチョイに教わった』である。幸せとは何か? が主題となった話で、他人にどう見られるかばかり気にしていたナカムラ君がそうではない幸せを見つける短編。なかなか友達や家族と幸せについて話す機会はなく、話し出すきっかけを見つけるのも難しいが、この章を読みながら色々なことを考えた。普遍(不変)的な答えは出せないかも知れないが、このことについて考えてみることは大切なことだと思う。学生時代の私が思っていた幸せと、今の自分が思う幸せは少し違っているし、10年後の自分の思う幸せも違っているかも知れない。久し振りに「私は今幸せなのか?」、「(私の思う) 幸せは何なのか?」と幸せについて考えてみる機会となった。誰もが、ナカムラ君の幸せ観に突っ込みを入れながら、読み進めようと思う。

本を読みながら、「そうそう」と相槌を打ったり、「そうかな?」と登場人物に突っ込みを入れたり、くだらなさについつい笑ってしまうことは、私の気分転換でもあり、考える場にもなっている。この本もそんな一冊だった。

(当館所蔵 分類番号913)